

**JSPSボン研究連絡センター****2014年度第1四半期活動報告
(2014年4月～6月)**

< 目次 >

1 2014年4月～6月の主な活動	…p 1
(1) 第19回日独学術シンポジウムを開催	
(2) JSPS サマー・プログラム プレオリエンテーションを開催	
(3) ボン大学主催留学フェアに参加	
(4) リンダウ・ノーベル受賞者会議に出席	
(5) ジュニア・エキスパート交流プログラムに参加	
2 2014年7月以降の主な行事予定	…p 6
3 センター長雑感	…p 6

1 2014年4月～6月の主な活動

(1) 第19回日独学術シンポジウム「薬学」を開催

日時: 2014年5月23～24日

場所: エアランゲン-ニュルンベルク大学(エアランゲン市)

ボン研究連絡センターは毎年、JSPS ドイツ同窓会との共催で日独学術シンポジウムを開催している。19回目となる本年は、“Pharmacy – a journey from Edo times to modern pharmaceuticals and health economics”をテーマとし、5月23、24日にドイツ南部エアランゲン市のエアランゲン-ニュルンベルク大学で開催した。同窓会員を含むJSPS 事業経験者を中心として、約130名が参加した。

第1日目のオープニングセッションでは、メンクハウス同窓会長の開会挨拶に始まり、JSPS 加藤国際事業部長、エアランゲン-ニュルンベルク大学 Prof. Dr. Joachim Hornegger 副学長、柳秀直在ミュンヘン総領事からご挨拶を頂いた。

続いて日独双方の専門家による講演が行われた。日本からは星薬科大学の亀井淳三教授、名古屋工業大学の柴田哲男教授、東京大学の鎌江伊三夫教授(以上講演順)の3名にご参加頂き、専門的にかつ一般の出席者にもわかりやすい内容で発表して頂いた。講演では、漢方薬について、江戸時代からの扱いや西洋医薬との差異、漢方薬の効能についての科学的分析等が焦点となった。また、最先端の薬学研究と、医療経済評価手法を医療政策に導入する医療技術評価も重要なテーマであった。参加者の関心は高く、質疑応答が活発に交わされた。

さらに JSPS ドイツ同窓会により、長年の同窓会活動への協力に感謝し、JSPS 加藤国際事業部長に同窓会名誉会員の資格が授与された。引き続き、ドイツ語圏と日本の間の交流や協力、ネットワーク構築に際立った貢献があった研究者に贈られる JSPS Alumni Club Award が、ケルン大学の研究者に授与された。

本シンポジウムのプログラム、講演内容等は、JSPS Bonn Office のホームページ (<http://www.jspd-bonn.de/index.php?id=1577>) をご覧ください。



シンポジウム会場前で



同窓会長の開会挨拶



講演と意見交換



JSPS Club Award 授与



JSPS 加藤国際事業部長に同窓会名誉会員の資格を授与



意見交換の様子



意見交換の様子

(2) JSPS サマープログラム プレオリエンテーションを開催

日時： 2014年5月8日(木)

場所： グスタフ・シユトレゼマン会議場(ボン市)

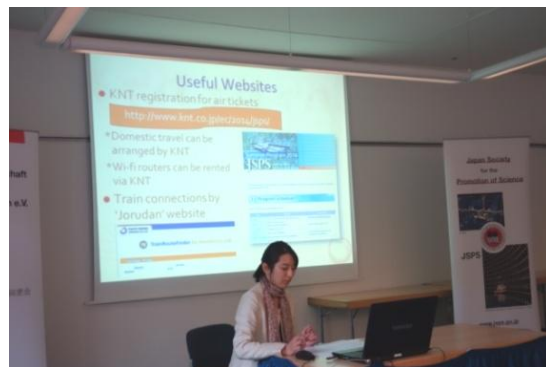
JSPS ボン研究連絡センターの主催により、5月8日(木)、JSPS サマープログラム参加者を対象として、日本出発前のプレオリエンテーションを開催した。サマープログラムは、6月から約2か月半の間、ドイツの若手研究者が日本で研究を行うプログラムである。

オリエンテーションでは、JSPS による事前準備のための案内や、前年の参加者による体験報告が行われた。また、サマープログラム参加後に応募可能な JSPS の各種フェローシップの紹介、DAAD の担当者による DAAD プログラムの紹介、ドイツ語圏 JSPS 同窓会 (JSPS Club) による同窓会の紹介と将来的なネットワークの発展についての発表が行われた。

これらの発表に続いて、質疑応答が活発に交わされた。前年度参加者2名による日本での研究活動の報告に関して、ホームステイでの体験、街中や研究室で英語がどの程度通じるか、食事のマナーや制限についてドイツと異なる点、携帯電話を含むネットワーク環境の状況などについて、関心が集まった。オリエンテーションに参加することにより、準備に必要な情報が十分得られたようである。



サマープログラム参加者と発表者



ボンセンタースタッフによる概要説明



サマープログラム前年度参加者の発表と情報交換

(3) JSPS ボン大学主催留学フェアに参加

日時： 2014年5月21日(水)

場所： ボン大学(ボン市)

ボン大学主催の留学フェア「AUSLANDSSTUDIENMESSE」が5月21日に開催され、JSPS ボンセンターもブース参加を行った。Schulze 職員、前小屋国際協力員、中沢国際協力員が参加した。この留学フェアは毎年この時期に開催されているもので、今回は各国の関係機関など40機関が出展し、来場者に対して留学や国外インターンシップに関する情報を提供した。世界の地域ごとにブースが設置され、留学プログラムや地域文化について紹介した。ダンスや音楽の披露、料理のデモンストレーションなど、各国の多彩な魅力もアピールしていた。日本からはJSPSのほか、ボン市内に事務所を設置している早稲田大学と筑波大学が参加した。

学部学生の参加が多いため、JSPSのブースではフェローシップの概要やサマープログラムのパンフレット等、修士課程以下の学生にも参考となる情報提供を行った。学生が将来のキャリアを考えるための情報として、参考になったと思われる。日本の大学全般の情報を求めている学生には、隣接する早稲田大学等のブースを案内したり、日本留学のための奨学金については国費奨学金のドイツ国内での申請窓口となっているDAADの紹介を行うなど、各機関と協力しながら対応した。

ブースと並行して、別室において、各国への留学やインターンシップ等を紹介する講演が行われた。数多くの学生が訪れ、盛況であった。

関連 URL

<http://www3.uni-bonn.de/studium/studium-und-praktikum-im-ausland/auslandsstudienmesse>



留学フェア会場(ボン大学)の様子

シュルツェ職員、前小屋国際協力員、
中沢国際協力員(JSPSのブース)

JSPSのブースでの配布資料

(4) リンダウ・ノーベル受賞者会議に出席

日時: 2014年6月28日(土)～30日(月)

場所: Inselhalle など複数の会場 (ドイツ・リンダウ市)

6月29日から7月4日まで、ドイツ南部のリンダウで「リンダウ・ノーベル受賞者会議」が開催され、小平センター長が6月28日から30日まで、日本から同会議に招待された若手研究者グループおよび文部科学省から参加した4名への側面支援を行った。リンダウ・ノーベル受賞者会議諸行事への出席(6月28、29日)、文部科学省主催昼食会(6月29日)の開催支援、および文部科学省の4名の送迎補助を行った。

関連 URL

<http://www.jsps.go.jp/j-lindau/index.html>

http://www.lindau-nobel.org/2014_Lindau_Meeting_Physiology_Medicine.AxCMS?ActiveID=2782

(5) 日独若手専門家交流プログラム「ジュニア・エキスパート交流プログラム」に参加

日時： 2014年6月30日(月)

場所： 連邦教育研究省(BMBF) (ボン市)

6月30日(月)午前、ドイツ連邦教育研究省(BMBF)において、ジュニア・エキスパート交流プログラム参加者の日本人若手研究者8名を対象に、BMBF、ドイツ研究振興会(DFG)、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団(AvH)およびJSPSの組織と研究フェローシップの概要紹介が行われた。

このプログラムは毎年夏頃にベルリン日独センターがBMBFの協力を得て実施するもので、日本の外務省が参加者を募集し、航空賃、滞在費等の経費はBMBFが負担する。日本の大学・研究所・企業等の若手研究者をドイツに招待し、約10日間にわたりドイツ各地の大学・研究所を訪問してドイツの研究者と意見交換する機会を提供する。対象者は自然科学系の40歳以下の官民の研究者で、毎回専門分野を特定して実施する。今年のテーマは「ナノテクノロジーと材料科学(特にカーボンナノチューブおよびグラフェン)」である。

BMBFのChristian Jörgens アジアオセアニア課長の歓迎挨拶とBMBFの概要説明、DFGのDr. Jörg Schneider 国際交流部長によるDFGの概要説明、フンボルト財団のDr. Tina-Maria Schieder アジアプログラム部長によるAvHの概要説明に続いて、大川副センター長がJSPSのフェローシップと日独の連携プログラムの概要を紹介した。それぞれの発表のあと、日独の学術交流について活発な意見交換が行われた。

関連 URL

http://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/de/page23_000856.html

2 2014年7月以降の主な行事予定

- 9月18日(木) 日本語研究者ネットワーク会議(於ボン)
- 9月18日(木) JSPS ボン研究連絡センター年次活動報告会“JSPS Abend“ (於ボン)
- 11月28日(金) 渡日プログラム説明会“Forschung und Studium in Japan“ (於ウィーン)
- 11月28日(金) “会員による会員の招待“ (於ウィーン)
- ～11月29日(土)
- 11月29日(土) 第2回ジュニア・フォーラム(於ウィーン)

3 センター長雑感

ネットワーク流行りである。最近では震災時にソーシャルネットワークが大活躍し、フェイスブックが民主主義制度の民意形成に穏然たる力を発揮している。ネットワークに入らないと、社会・コミュニティーから落ちこぼれる。研究者ネットワーク作りも盛んである。「人間」と書くように、人に「間」の字をつけるくら



いであるから、人と人の繋がりは大切であるには違いない。しかし、若い人が孤独な思索に耽るのも大切ではないか。ネットワーク流行りで、自分ひとりで物を考える時間がなくなり、逆に、ネットによる人間疎外が起こっては居ないだろうか。

似たようなことが、プロジェクトにも言えそうだ。若い研究者がプロジェクト・チームに入る機会が多くなっている。既定の研究者ネットワークに組み込まれて、目的の定められた仕事をする。プロジェクトでは一定期間に一定の目標を達成しようとする。立ち止まって一から問題の本質を見極めようとする自分に「誠実」な時間は少なくならざるをえない。若い将来を担う研究者がそれで良いのか。

国際交流支援でも、個人目当てのフェローシップが減って、プロジェクト・チームとして参加する共同事業プログラムが増える傾向にある。新しい環境に飛び込んで自己修練をするポストドクトラル・フェローシップよりも、既定プロジェクトのチームに加わって研究成果増進の足しになるプロジェクト・メンバーの募集が賑わっている。「競争的資金」獲得のために、目的志向の競争が当然のようになって、純粋な学問が阻害されて行く傾向にある。

今年のリンダウ・ノーベル受賞者会議の第一講演者であった Randy W. Schekman 博士は講演の最後の時間を割いて、「学術が学術以外の要素に左右されつつある憂うべき事態」に言及し、学術成果への報奨金制度の弊害や、独占的有力商業誌への出版の過剰な評価が生む弊害について述べた。今回の会議分野が生理・医学であっただけに、当該分野での最近の出版問題、成果発表問題を念頭に置いての話であったことに間違いない。参加していた若い人達からも溜息が聞かれた。予算配分機関長会議(HoRCs)などでの議論の進展に期待したい。(2014年7月3日)

小平桂一

ぼんぼん時計第44号

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)

Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)